慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	稲荷社祀官大西親盛の和歌 続：京都学･歴彩館蔵『〔歌日記〕』翻印と解題 (一)
Sub Title	A sequel study on waka poetry of Onishi Chikamori, a shinto priest of Fushimi Inari Shrine in the middle Edo period : research and reprint of "utanikki" owned by the Kyoto Institute, Library and Archives
Author	一戸, 渉(Ichinohe, Wataru)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2019
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.54 (2019.) ,p.19- 55
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	佐藤道生前文庫長退職記念
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20190000-0019

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

稲荷社祀官大西親盛の和歌 続

―京都学・歴彩館蔵『〔歌日記〕』翻印と解題（一）―

一戸　渉

はじめに

本稿は『斯道文庫論集』第五十三輯に掲載した拙稿「稲荷社祀官大西親盛の和歌―東丸神社蔵『松葉集』解題と翻印―」（以下、前稿）の続編として、京都学・歴彩館の所蔵する大西家文書乙に含まれる大西親盛（一七〇三～一七七八）の歌稿を翻印し、解題を付すものである。該書は書名が付されておらず、所蔵機関において「〔歌日記〕」という書名で整理されている。内容は日記というより年ごとの詠歌を書き留めた歌稿というべきものであるが、本稿では所蔵機関の整理書名に従うことにする。

前稿でも述べた通り、親盛は稲荷社祀官にして非蔵人を兼ね、また荷田春満及び冷泉為久・為村・為泰の指導のもとで和歌の修練を積んでいた。前稿で紹介した『松葉集』は元文三年（一七三八）から明和二年（一七六五）にかけての詠歌を収録するが、本稿で取り上げる『〔歌日記〕』は、明和四年（一七六七）九月から安永七年（一七七八）六月にかけての詠歌を収録しており、約二年間の空白を挟むものの、これら二書によって、冷泉家入門後の親盛の詠歌活動のほぼ全貌を把握することが可能となる。

分量の関係上、本輯には前半部分（巻頭から安永二年まで）の翻印を掲載し、次輯に後半部分（安永三年から安永七年まで）

の翻印と解題を掲載することにする。なお、『〔歌日記〕』の書誌を略記しておけば以下の通りとなる。長帳綴。一冊。無表紙。一四・三×三九・六糎。〔大西親盛〕〔明和四～安永七年〕写。整理番号大西家資料乙五二八。

『〔歌日記〕』翻印

〈凡例〉翻印にあたっては、以下のように処理を加えた。

1、漢字は原則として通行の字体に改めた。
2、変体仮名は現行の仮名に改めた。
3、明らかな誤字、脱字や衍字等は、適宜、右傍に（ママ）などと注記した。
4、通読の便宜を考慮し、和歌を除いて読点を付した。
5、虫損・破損等で判読の困難な箇所はその文字数分の□で示した。
6、和歌や文章の添削は該当字句の左傍に抹消符として「〻」を用い、訂正字句のある場合は該当字句の右傍に記した。
7、数度にわたり訂正が加えられるなど、通常の翻字のみでは原本の状態について表現が困難な場合、後注にて現状を説明した。
8、和歌の詞書や歌題、肩付や左注の類は原則として二字下げとした。
9、和歌は原本では二行に分ち書きされているが、字配は無視した。

10、細字注記など原本の表記をなるべく尊重したが、読みやすさを考慮して適宜修正を加えた。
11、各年の冒頭に記される年号についてはその前に空行を入れ、読みやすさを考慮して字下げなしで記した。
12、添削以外の単なる誤字の訂正については訂正後の形で翻字した。
13、符号などを用いて排列移動の指示が付されている和歌については、その指示に従って排列を改めた形で翻字した。ただし移動位置が不明瞭なものについては原本のままとした。
14、その他、校注者による注記は（　）内に記した。

（前欠カ）

九月十三日竈家信名宿祢後室弁号真寿院三回忌信郷追慕勧進

十三夜月 組題十二首巻頭

長月やみとせの秋のおもかけをこよひ名高き空にしのはん

九月十日於毛利豊後守亭

稽古会応乞当座

花埋苔

雪とのみふり敷はなに埋れてこけのほそ道わけそまとへる

九月十三夜於月前詠十三夜月十三首

稲荷山秋の最中も松葉のこすゑを照す長月の影

長月の兼てまたれしかひ有てこよひ名たかく照す山端

珍しなたくひ最中の秋もあれとみちさる月の照まさる夜は

日につける光りやこよひ長月の空に神代の秋をしそ思ふ

いはまくもかしこけれとも日にならふ光りや今宵月読神

めてそめし御世の光りを長月の今宵照そふそらにあふかん

くらへ見ん光そこよひ玉くしけふたゝひ月の名にしおふ空

唐人はしらしな今宵日本の光名たゝる長月の空

唐国はしらすねなまし照増る此秋つすの月の今夜を

とよあかりみよの光もいちしるくくまなき月の空にあふかん

秋ふかく月のかつらや染ぬらんわきて照そふのちの光は

最中てふ秋に光はおとらしと猶なか月の空そ照そふ

千世かけて秋や幾秋めてなゝんまさきのかつら長月の影

九月十三日及深更従信郷之許題三首到来応請詠之

十三夜月

今宵尚やまと嶋根の名も高くそらに照そふ長月のかけ

池月

秋風に雲霧はれて池水もちりなく見えて澄る月影

寄月忍恋

うしや世に忍ふ涙もやとりこし袖の月にはえ社つゝまね

九月廿七日家母十三回追悼組題七首之内詠三首残四首親臣

親業詠之

稲荷社奉納

十月分

氷初結

此朝け河風さえて行水のよとむ岩間や氷そめけん

十月十日竈家会

社友稽古月次

江寒蘆

御点

浦風に入江さやきて霜枯の蘆間とほらぬ浪も寒けし

三嶋江やほの見し秋の面影もなみ間寒けき霜の枯蘆

同当座応求　水辺蛍

かけうつす蘆の下水葉かくれに見えみ見えすみ蛍飛かふ

暮秋残菊　信郷応求

暮そ行秋はまかきのよそなれや尚咲のこるしら菊の花

閏九月尽　同上

長月をかさねなれしもあたなれや残る一夜の秋のわかれも

十一月分

稲荷社月次奉納

社頭雪

稲荷やまとしある御代のしるしとてこたかくふれる枕のしら雪

月次稽古会

十一月分

遠山雪

雪はれてむかふこしちにふり積るゆきをみやこの遠の山端

今年十二月

松本家為紀百五十回為勝勧進

冬懐旧

思ひ出て松も昔をしのふらん世々ふりにける雪の軒端に

来年子二月十四日冷泉家為満卿百五十回追慕為村卿出題勧進

春懐旧

年ことに咲そふ花の梅か香に植しその世のはるやしのはん

来子年十一月より二月取越毛利家公慶宿禰百回公林宿禰追

慕勧進百首組題之内得五首

立春

荒玉の年のをたまきくりかへししたふその世の春やきぬらん

山葵

跡をとふ山路の葵とりそへてこれも手向けん露の言の葉

暁荻

小夜ふかく萩吹風に夢たへて見ぬ世をしのふ暁の空

千鳥

よせかへる浪のうきねの小夜枕哀をそへて千鳥なくなり

待恋

かり枕たのめしよひの更るをもおもひかへして尚や待見ん

已上五首

十二月十九日
松本和泉守亭月次稽古会応求当座

羈旅

ふる里の夢路もたえて小夜深旅ねの床に積るしら雪

稲荷社月次奉納

十二月分
早梅匂

神垣に春の立枝の色見えてとしをへたてす匂ふ梅か香

於松本讃岐守亭月次稽古会

十二月分
網代

哀世をわたるわさとて網代もるそて寒からし宇治の川かせ

当座
祝言

幾千年尚もさかえん家の名の松にそ契る言の葉の道

極月十七日
年内立春

今朝の先春きにけりと尚残るふゆの日かけも更に長閑けし

右為村卿より結句殊外宜之由預御賞美之御加筆

いとはやも年のこなたに立□□□霞の衣はるは来にけり

亥歳暮　予六十五歳

御点
雪とのみ身はいたつらに六十あまりいつしか年のふり積り行

梓弓春をいそきし身は老て今年は暮のはやさをそ思ふ

子歳旦

御点
此朝け霞もともに立そむるはるの光や四方にみつらん

アカクラ
冥渟に霞て春の立かへる空や神代のためしならまし

明和五年正月

稲荷社月次法楽　冷泉家出題

正月分
峯松年久

稲荷やまいやとし高く春にそふみとりをみつの峯の松原

稽古始
二月一日冷泉家
柳弁春

時そとや宿の砌に青柳のなひく姿は千世の春風

二月廿二日松本讃岐守方へ被招詠哥

讃岐守の許に花見にまかりて

浅からぬ人の恵みの色そへておいか心も花にわすれぬ

稲荷社奉納

二月分
春草漸青

また浅き春のなかめも深草の野はいつしかにみとりをそゝふ

同三月分法楽
瀧辺花

散ぬ間の浪も桜に埋れてはなより落る瀧のしら糸

三月十六日
於東家社中稽古会始

月次二月分　得兼題三首

庭梅

年ことに咲そふ庭の梅かへは千世の春しる花と社しれ

同
柳風

花にいとふ心も更に忘られてやなきにあかぬ庭の春風

同
待恋

ふけぬとて猶も待みんこぬ夜とてあけぬ限りは打もねられし

同十六日当座得探題

籬菊

秋幾世菊は笆ににほふらん老せぬ花の色をかさねて

社友月次稽古会三月分

四月十九日於羽倉上総介亭会補

花

春ことに花こそしらめあこかれて色香にそむる老の心も

同日当座探題之内到来応求

野若菜

小松はら子日せし野にけふは又ちとせをしめて若菜つまゝし

当社法楽月次

四月分
山早夏

立残る霞も今朝はなつころもみとりを山の色にかさねて

社友稽古月次四月分二首

於毛利豊後守亭会　探題　五月十一日

卯花

夕やみの空にしられぬ月雪の光を見せて咲るうの花

窓竹　同断

昔誰めてはしめけん呉竹の直を友と窓にうつして

詠牡丹花

植残すめくみの露も深み草花にむかしの春やしのはん

右三月廿七日捧灵壇於牡丹花時着花供進哥

同詠牡丹

浅ちふの宿も色香のふかみ草またたくひなき花と見るまて

右者四月朔日詠之

四月八日初聞子規作哥

山近くすますは聞かしほとゝきすまた世にしらぬ今の初音も

当社奉納
五月雨　五月分

五月雨に猶音高しいなり山みかさまさりて落る瀧波

五月十九日於松本信濃守亭月次会

橘　当座暁夏

見し梅の春も昔としのはれて猶も軒端に匂ふ立花

雪中鶯　同当座四月分

咲梅の花はそれともしら雪の梢に、ほふ鶯の声

水鶏　同

心なくかとさせりとや叩らん月にくひなの我をいさめて

照射　同

音にたてぬ鹿のおもひの落ならん峯にもをにもともしするよは

当社奉納
夕立雲　六月分

雲はやみふると見しまにいなり山よそにすき行夕立の空

相模会当六月分稽古会二首

簾瞿麦

結ひ置笹の露をたてぬきにしき織なすやまと撫子

名所松　同断

墨の江の松にそおもふ老の波かけてかひある言のはもかな

松藤　同当座

春ふかきみとりも花に埋れてかせも音なき松の藤波

五月十九日於松本信濃守亭会

暁夢　得題当座

覚て今あかつき深くしたはる、哀むかしの夢の行衛を

童蒙稽古会　六月

夏月涼

夕暮はたへかたかりし暑をも月にわする、袖の涼しさ

大西東家親方宿禰十三回忌追慕親業勧進組題之内

早春鶯

めくりこし春の昔をなれもけふおもひ出てやうくひすの鳴

当社奉納七月分

野径萩

わけ行は露も乱れん真萩原花咲うつむ野辺のほそ道

月次稽古会七月分　祓川常陸介催

萩

今しはし露なから見む真萩原ふきなみたしそ花の夕風

薄　同上

すみれ草摘し野もせの花すゝき招くを春のゆかりとやみん
同上
祈恋
祈るてふしるしもあれな貴布祢川うきとし波を袖にかけきて
子等稽古会
七夕
雲霧もたちなへたてそ此ゆふへまれにあひあふ星の中空
当社法楽月次
八月分
霧中鳫
立こめし霧の幾重もひまあれや見えみ見えすみわたる雁かね
社中月次稽古会
八月分
槿　羽倉摂津守催
植てみるこゝろの色も秋露ふかく露秋にかゝれる朝かほの花
鶴　同断
夕なみのそれかあらぬかしらつるのあしへほのかに立るをそ見る
八月廿七日於祓川家会探題到来
当座
社頭榊
かけ高く霜をかさねて神垣に幾世かふりし森の榊は
九月十日当座
於竈家会探題到来
閏九月尽
いつはあれと尚社惜め長月をかさねてなれし秋の別を
当社法楽月次
九月分
菊帯露
御点　花の
いとゝ尚光をそへて秋ふかく置そふ露に匂ふしらきく(1)
無点
神垣にさゝくるみかの菊の露つかふる袖もぬれてかほれる
稽古会　松本讃岐守催
九月分
月前菊
霜ののちうつろふとしも見えぬまて月に色そふ秋のしらきく
新樹風
吹みたす露も涼しき若緑花にいとひし庭の朝風
当社月次法楽
十月分
朝時雨
稲荷やま今朝は冬立しるしとやすき間くもりて先しくるらん
社中稽古会月次　大西下野守催
十月分
千鳥
浦風のはけしきまゝに小夜千鳥なみの立ゐのこゑそひまなき
羽倉上総介信賢勧進外祖父一周忌霜月上旬追善
寄夢懐旧

さらてたに昔をこふる老の身の夢の枕にしたふおもかけ

稲荷社法楽
十二月分
水鳥多

さゝ浪やにほてる月に影そひてかす〳〵見ゆる浦の水鳥

社友稽古会　十一月分　権目代信賢催
水鳥

池水のをしの毛衣小夜ふかくしもをかさねて音をや鳴らん

稲荷社法楽
十二月分
竹雪深

音たかくつもるもしるし深草やたけの葉山の雪の下折

稽古会十二月分
蔵川常陸介催
鷹狩

野を遠みかへるさいそく狩人もとたちに又そ心ひかるゝ

眺望

墨江や遠きなかめも此朝け雪に間ちかく向ふ嶋山

明和六年

稲荷社法楽始
鶯知万春

いなり山八百万代の春しめて杉間に来居る鶯の声

冷泉家会始
子日祝

庶人もよはひを野への小松原ひきつれいはふ宿の初子に

当社月次法楽
二月分
柳先花緑

浅みとり春の柳のいとはやも花にさきたつ色をこそ見れ

当社月次法楽
三月分
落花如雪

木かけのみふり社まかへ山桜風のさそはぬ花のしら雪

社中月次稽古会
二月分於竈家会始
春嶺杉

いなり山春のしるしと峯高くみとりをそへてかすむ杉村

同当座
葦間鶴

難波かたつのくむあしのめも春にあそふ友つる長閑かるらし

於東家下総守亭十月分会
補当座
浦初秋

秋きぬと色は見えねと松にふく音にそしるき志賀の浦風

社中月次稽古会三月分
於当家親臣之会当三月分補兼題
花留客
けふこゝに花をとひ来てをのゝえの朽しためしも色香にそおもふ
当社法楽四月分
雨中新樹
しけれ尚かけそふ露の玉かしは若葉うるほふ雨のめくみに
肥後国祇園社神職行藤志摩守北野社へ奉納之由勧進祇園社
僧新坊ヨリ頼来
花鏡
くもらしなあけの神垣かけみえて照そふ水の花のかゝみも
社中稽古会四月分於毛利豊後守亭被催但去月補会也（五月廿五日）
首夏藤
見し春の色のゆかりと立よれは若葉しけりてかゝる藤波
当社法楽五月分
五月郭公
時鳥いなりの山のすきかてにをのかさつきの声そ木高き
社中稽古月次五月分
野郭公
時鳥つまやこふらん野をしめてさつきもわかぬしのひ音の声
当社法楽
名所鵜川（六月分）
鵜ふねさす篝や幾瀬大ゐ川あらしの山も照すはかりに
社中稽古会
松下泉（六月分）
涼しさはむすはぬ袖もかけふかく松の下行庭の真清水
四月於毛利豊後守亭稽古会得探題
郭公何方
夕間暮おほつかなしや時鳥行方わかぬ今の一声
去年十月分補稽古会於大西下総守亭被催探題到来
契経年恋
瀬にかはる習そつらき飛鳥川幾とし波をかけし契りも
去年十一月分補稽古会於羽倉上総介亭催探題
花慰老
春ことにふりせぬ花の色香にそこゝろをそめて老もわするゝ
東丸先生今年明和六年七月二日三十三年にめくりけれは老
翁の御灵に詠て奉る哥といふ十五字を冠に置て秋哥にふる
きを思ふ心をよせて供ふ哥十五首

を
思ひ出て昔をしたふ袖にけさつゆ置そへて秋は来にけり
散そむるもろき一葉の秋風に哀むかしのなけきをそおもふ
軒近くしのふ昔のあき風やをき吹みたす音そかなしき
見し人のなき跡とへはあれはてゝ尚ふり残る露の秋萩
たかために昔こふるや女郎花身はあたし野の露とけぬへく
招かねと跡とふ野辺の花すゝきつゆも深草そてそしほるゝ
匂ふその野となる庭の蘭香をなつかしみ我はとひきつ
蓬生に庭の訓の跡ふりしあきをとひきて鈴虫の鳴
都辺にむかしの秋をしのひ鳴雁のなみたや袖にしくるゝ
照そふる月や昔の面かけに妻こひすらんなら鹿の声
待むかふその山端におもひ出るつきの昔の秋のあはれを
積りこし秋をかさねて衣打あはれ夜さむはむかしかはらて
類いもなき色香に人をしのへとて秋幾めくり咲るしらきく
薄もみちぬしなき跡に年ふりて秋やなけきの色に露けき
手向しぬ秋の言の葉露なからみそとせあまりみとせふりきて

以上十五首

冷泉家為益卿八月廿三日二百回忌供進之旨民部卿為村卿勧進

秋懐旧

あふけ猶遠きむかしのめくり来て月にその世の秋の光を

於毛利家会得題当座

寝覚月

みし夢の思ひも月に忘られてねさめにむかふ影そたのしき

於松本信濃守亭会得題当座

冬月

天川空やこほりてすみわたるかけも寒けき冬の夜の月

当社法楽

新秋夕露（七月分）

秋きぬといなりの山田打そよくかせも涼しく結ふ夕露

荷田信郷稲荷山の十二景をえらみ作れり。嶋田内近助、紀元直に其景を画しめ東涯子か孫伊藤忠蔵善韶（ヨシオト）に詩を作らしめて既に壹巻とし、信郷是を提来て愚詠をこふ。予一たひ三たひいなみ侍れと又かたくいなむも心さしをへたつるさまに似たれは、もたしかたく読侍る哥十二首

三峯翠黛

麓より春は一入山まゆのみとりをみつの峯のこたかさ

祓川桜花

みそき川かけをうつして山桜色香たへなる花のしらゆふ

不涸流泉

尽せしな幾世を杉の春ふかくみとりをうつす山のいつみは

平原矮松

花なれや小松か原に詠めやる遠のたかねにかゝるしら雲

孤巒返景

暑き日もいとはぬわさに暮ちかく真柴とり〳〵帰るやま人

阪道驟雨

時の間に坂道つらく雲とちてあらしにきほふ雨の足とき

剣巌蒼苔

山かけのみとりも深く動なきいはほも苔の色に涼しき

杉間青楓

涼しさはなつもよそなる谷陰にすきもかへても若葉しけりて

栗谷急湍

谷ひゝく瀧のなかれも秋ふかくうつすもみちの色かはり行

三角明月

照まさるいつくはあれと此山のみねより峯にむかふ月かけ

新池水禽

池水にさそふ嵐の木葉かといろ〳〵見えてうかふ鴛鴨

童山白雪

此朝けこゝにわけきて見わたせはよにめつらしき雪の山〳〵

已上十二首

非蔵人橋本越後橘尭常之七十賀橋本下野尭直勧進

寄鶴祝

此宿に千世をかさねて契れ猶松にきなるゝ鶴の毛衣

花色

なへて世にあかぬは花の色ならん心をそめぬ人しなけれは

月次稽古会於松本讃岐守亭被行之七月分

草花露

朝日さす草の笆に咲花のいろをかさねて置るしら露

探題当座七月廿六日松本讃岐守亭会

湖氷

吹おろすひらの山かせさえ〳〵てよするもこほる志賀の浦波

当社法楽

八月分

山月初昇

澄のほる月はいなりの山高く光をみつの峯に照そふ

稽古会八月分八月十日於下総守亭

湖上月 兼題

浦かせに雲霧晴て月こよひ光みちぬるしかのうな原

名所里　当座

とはてしも伏見てふ名は家〳〵の軒端にしるき里の呉竹

当社法楽
九月分
山家秋深

此ころは鹿の鳴音も身にしみてあきのふけ行山陰の里

稽古会九月一日相模守会当兼題

暮秋虫

くれて行秋のわかれを恨みてや哀よふかく虫の鳴らん

同当座探題

橋霞

行かたも見えすかすみて旅人のわたるも遠きせたの長橋

九月十三夜月

末遠く秋を契りて老も見ん世をなか月の名にしおふ影

北山詩仙堂毘丘尼勧進

隠士石川丈(ママ)三百回忌為追善千人千首組題勧進

閑居月

秋のこよひ月には尚もしたふらんちりなく住(スミ)し人のむかしを

古上北面羽倉縫殿頭入道延純五拾四忌追慕羽倉紀伊守荷田信里勧進
且代別家氏人也

若菜

めくりこし昔の春を思ひ出てわすれかたみに若菜をそ摘

愛菊友伏見奉行組与力津田為右衛門為追善於伏見本教寺菊花供進会着菊花哥

契り置千世もまことに露の間とまかきの菊にしたふおもかけ

稲荷社法楽

十月分
枯野朝風

見し秋の色としもなく霜枯て尚置そふる野辺の朝風

於信邦亭稽古会兼題

十月分
瀧落葉

風さそふ音羽の山は紅葉丶のくれなゐふかく落る瀧つ瀬

同日探題当座
擣衣近

宿ちかく聞に哀は深草のつゆもひまなく衣打こゑ

稲荷社法楽

十一月分
雪中残鳫

秋にをそれ
をくれきて雪のふ丶きや払侘つはさを寒みわたる雁か音

稽古会月次

十一月分
雪未深

けふはまた問はや雪の浅茅原あすもふりなは道やたえなん

下鴨社禰宜馬蓑九百五拾年遠祭泉亭　勧進

飛鳥井家御出題
寄竹述懐

移し植しその世はしらししら雪のふりきてしのふ軒の呉竹

稲荷社月次法楽

十二月分
家々歳暮

かはらしな宮もわら屋もへたてなく暮行としをしたふならひは

於目代稽古会信賢催

十二月分
年内梅

いとはやも梢に春の色見えて年のこなたに匂ふ梅かゝ

十一月稽古会得題当座

寄鳥恋

我身尚この夜更行鳥か音をおもひそへつゝきゝそ侘ぬる

来寅二月中臣延兼一周追慕

若菜　組題　二首

いさ我も行て摘なんなき人をわすれかたみの野辺の若菜を

梅雨

一めくりはやもふりきてなきかけを空にそしたふ五月雨の比

明和七年

稲荷社法楽

正月分
柳弁春色　宗匠家出題

神垣に春のめくみの色見えてして打なひく風の青柳

宗匠家会始

二月一日分
松契春

色そふる砌の松のかけ高み千世万代の春を契りて

正月廿三日豊丸七夜にいはひの心を

なりいつる稲荷の山の陰高く猶もさかゆけ春のみとり子

二月社友稽古始兼題

花色春久

春ことに詞の花も色そひて尚幾千世も咲匂ふらし

稲荷社月次法楽

二月分
山余寒

いなり山こその嵐やすきかてにころも手寒きゝさらきの空

社友稽古会始親臣催

二月分於当家会始当座

立春風

久かたの空も長閑天津かせ雲吹わけて春や立らん

晴

医師間杤亨安九十賀勧進冷泉家出題

寄菊祝老

老か見ん千世のかきりもしら菊のふりせぬ花の秋をかさねて

稲荷社月次法楽

三月分

瀧下藤

いなり山暮行春を瀧つせにせきとめんとやかゝる藤波

三月十八日人丸御影供進幾字を置頭下鴨為祐勧進十八首之内

別恋

聞からにいそく別のわりなさを鳥はしらしなまたき鳴声

月次稽古会於松尾駿河亭兼題三月廿二日

籬款冬

ことゝへといはてう花に春ふかきまかきをしめて咲る山ふき

同当座得採題

落花

さそはても心なからや散花を吹なみたしそ庭の春風

三月十七日

江戸上野日光前御門跡随自意院宮御家来高橋図書より中菊

苗を贈為謝詞

高橋のぬしは元より菊を愛し給ふよし、うつ日さす都をはしめ、あまさかるひなにいたるまて、その名聞え侍りて、世にもてはやすなみ〳〵の菊にはあらて、鳥かなくあつまより秘蔵しもたる菊あまた侍るよし、花のみやこは名のみにて似及ひたる花もなしと聞えける折ふし、或人来て、菊は老たる人のもてあそひものにしく物はなし、とさとし教ぬ。やつかれも元より花をすきこのみ侍りけれは、かねて見まほしく、さきのとしの秋、ぬしのもとにまうてゝ花を見侍るに、数あまた色をましへ、なへて見なれぬ花のすかたかたち、えもいひしらぬ色香枝葉にいたるまて、うるはしくひたし生たてるさま、きゝしにもいやまさりておとろき侍りぬ。もしぬしゆるしてめくみ給はゝ、植みまくほし、秘蔵のものをこふも心なけにおもひ、もたし侍りぬ。されと老かおもひをしとゝめかたく、又たゝにこはんもくるしけれは、安田の家にてたはれなからされ哥を作りて菊苗をこふ心をよせてよみ侍を伝へ給へとたのめに、そのいなせをまち侍れと、いなり山のまつにはしるしなく、音羽山の音も聞えす打過ぬ。さすかに人のなさけも春ふかくおも出給ひて、やよひの中つころ菊苗七種はかり安田の家につけてめくみ送り給ふ。露あさからぬ心さしの忝なみは置ところをもしらす。此かしこまりのいやいひのへんため色なき言のはなから書付侍る哥二首

従三位親盛

春ふかき人のめくみの菊を植て花を見はやと秋を社まて

うつし植し菊には春も忘られて今はた秋の花をしそおもふ

（以下貼紙）

高橋図書より返哥

こひ給ふ事のいなみかたくて、賤か垣根に生出ける菊の苗をとりわけてまいらせけるに、春の花の中にも秋のけはひをなつかしみ給ふよしを二首の和歌にものして恵まる。いやしきことのはなから、そのかしこまりを申とてかくはよみて奉り侍りける。

源高保

あはれてふ秋にめてけんことのはも今はた花の春に丶ほへる

（以上貼紙）

三月廿四日松本讃岐守嫡子始而誕生忌明参社対面名云峯千代

峯千代社頭にまうて給ふ日まみえ侍りけれは寄松祝の心を

峯高く栄えん松の二葉より千代万代のかけそこもれる

牡丹

手を折て咲そめしよりかそふれはなにおふ草のはつかへにけり

宗匠家より牡丹を絵かける末広を給はりけれはかしこまりに

神垣にまつとりそなへ末広くさかふる道を猶も祈らん

あふきてそ見れはかしこきふかみ草心をそめし君の恵みと

稲荷社法楽月次

四月分

初郭公

稲荷山住は社きけ時鳥枕の木間にしのふ初音を

稽古会兼題於竈家会石見守

四月分

挿葵

老も又かくれんけふの葵草みとり涼しく若葉かさして

稲荷社法楽五月分

連夜水鶏

たか門と音もわかれす五月やみよな〳〵何をたゝく水鶏そ

稽古会兼題五月分於松本駿河守（大西下総守）亭[3]

五月分

樗

見し藤の色をゆかりに朽かはす松の木の間にあふち咲らし

四月分当座竈家より到来

残菊

秋ふかき霜をも花にいたゝきてふりせぬ色の残るしら菊

稲荷社法楽

六月分

水辺蛍

稲荷やま瀧のしら糸ぬきとめぬたまかと見れは蛍飛かけ

月次稽古会兼題大西下野（松本讃岐）（上四字抹消）守亭

六月分

家々納涼

峯の庵ふもとの里もかけろひておなし心にまつの夕風
同五月分当座松本讃岐（大西下総）（上四字抹消）守亭会
田家
早苗とるしつかゆきゝの音伝に小山田ちかき宿そにきはふ
稲荷社法楽
竹風夜涼（六月分）
吹そよく音も涼しくささ竹のよふかき窓にかよふ秋風
稽古会祓川親富
名越祓（関六月分）
誰つみもみなつきならし世はなへてもれぬなこしのけふのはらへに
同六月分当座大西下総（松本讃岐）（上四字抹消）守亭会
花留人
しはしとて立よりなからかへるさもおもはすくるゝ花の木の本
後（上一字抹消）六月一日祓川家会探題到来当座
見恋
浦にすむ身はあまならぬしわさにもみるめはかりをたのめにはしつ
稲荷社法楽
薄出穂（七月分）
朝またきゆふかけけりとしの薄ほのかに見えてあけの神垣
於毛利豊後守亭稽古会
残暑（七月分兼題）
秋きても残るあつさになつころも日もゆふかせそ袖に待るゝ
毛利家会探題到来当座
郭公稀
ほとゝきす聞そまれなるいなり山五月もやかてすきの下庵
稲荷社奉納
月浮流水（八月分）
川水の底のさゝれの数見えてなかれもきよくすめる月影
於権目代信賢之亭七月廿一日
月次稽古会兼題
月（八月分）
しはしいままつもかひある稲荷山枕間ほのかに出る月かけ
為廉勧進
秋懐旧（七月）
露ふかく宿には尚もしたふらしきえし三とせの秋をむかへて
於信賢亭会探題到来（七月廿一日）
野月（当座）
月もまたおもひ出らし深草の野辺となりこし秋のむかしを

九月廿日信満信郷実父一周忌

秋懐旧

さめて尚ともに月見し面影を空にそしたふ秋の夜の夢

十月十三日五百五拾五年遠祭
鴨長明年回　梨木家祐為上総介勧進

冬懐旧

三　四軸も
神無月世々にしくれてふり残る名を聞まゝにしたふ言の葉
一　二　五
右私に改

稲荷社月次法楽

九月分
籬下菊

山路より菊は笆に千世こめておいせぬ色に咲匂ふらし

九月分稽古会
八月十日於信郷亭稽古会

紅葉如錦

常磐木も秋は紅葉に埋れてにしきと見えぬ山端もなし

十月分
稲荷社月次法楽

落葉随風

稲荷山夜半の嵐や杉の門あけて落葉の積るにそしる

八月廿日
於松本讃岐守亭稽古会

兼題十月分
夕時雨

夕日かけさしも定めす時雨行くものまに〳〵晴くもるらし

於信郷亭会採題到来

当座
氷始結

絶す聞山下水も今朝はまつこほりそめてや音のしつけき

八月廿日松本為廉亭採題到来

当座
帰雁

春霞尚もへたてよこしの山かりのこえうく立かへるへく

九月四日（上四字抹消）
於松尾駿河相長亭稽古会

十一月分
冬夜

吹そよく竹の葉風も音さえてよふかき窓に霜そ置そふ

九月三日相長会当
右同日採題到来当座

款冬

春ふかく染なすまゝに山吹はえもいひしらぬ色に咲らし

十一月分
稲荷社法楽

河上氷

稲荷やま瀧津川瀬も氷つゝたえぬ流の音そしつけき

同月次法楽

常磐木雪

ふり積る雪としもなく稲荷山枕の木かけは道を残して

於松本信濃守亭稽古会
十二月分
雪

とへかしな庭は浅茅の雪なから山端ちかく見るに待れて

右同日会得探題当座
九月十五日
浦松　高教会当

言の葉のつきせぬ道を例にそ世々に栄る若の浦まつ

来卯年三月六日冷泉古中納言為綱卿為村卿祖父也五十回追慕冷泉入道澄覚殿勧進

春懐旧

そのかみの春の手向をおもひそへ色香にしたふ花のしらゆふ

此哥の意は故中納言殿当社江御法楽之内ニ社頭花といふ題に□稲荷山春幾かへりさほ姫の手向□□□

今年十二月中旬冷泉入道澄覚殿より予筆にて寿字をこはれけれは筆をそめて送ける。そのいやに給ふ短尺に

謝　寿之字染筆

寿もなをやまたかくつみうへむいなりの寿喜のなかくつかへて

澄覚

答

御詠　即答
短冊

神垣に尚社祈れみいのちのなかきしるしの杉をためしに　親盛

年の内に鶯の鳴けるを聞て

めつらしな冬の日なから長閑さに木の間ほのめく鶯のこゑ

年内立春

冬なから春立空に朝日かけ雪けの雲もはれて長閑し

歳暮

春秋の名残もけふはとりそへてくれ行としそ尚もつれなき

尾州横須賀坂丈之進返書之内に

紅葉摺の貴詠に

いなり山杉の木かけのもみち葉をきみにみせまく思ひそめけり

とよみ□給ひて下しおかれけれは　正盈

稲荷やま名高き君かことのはにふかき紅葉の色を社見れ

明和八年

元日祝詠

長閑なるかけいちしるし久かたのあまつ日つきの千世のはつ春

うち日さすみやこの空に立春の春の光や世にあふくらん

鶯を聞て

山ちかく住すは聞し鶯の谷より出しけさの初音を

いとはやも梅か香さへに鶯の初音をそへてさそふ春風

稲荷社法楽始（正月）

雪消山色静

稲荷山きのふの雪の消てけふのとかにかすむ峯の杉村

二月一日宗匠家会始

寄若菜祝

千世幾世尚つみそへむ春の野のわかなにいはふ宿の言の葉

社友稽古月次会始於松本讃岐守

鶯（正月分　二首懐紙）

年ことに春を契りて咲梅のはなにきなるゝ宿の鶯

雉（二月分　右同断二首之内）

若草の妻こふるらし春の野にかすみへたてゝきゝす鳴こゑ

下鴨社禰宜正三位俊永卿六十賀俊春卿勧進（飛鳥井家出題）

松為久友

神垣に松のときはのかけしめて幾世さかへん友と社みめ

詠稲荷詣

初午や引つれ祈るもろ人のめくみへたてぬみつの神垣（御点）

稲荷社法楽（二月分）

垂柳臨水

水鏡かけをうつして青柳のなひくを風のみかくとや見ん

同法楽（三月分）

花有遅速

をそくとくこなたかなたに咲続て色香尽せぬ花の木の本

社友稽古会月次三月分会当親臣　但探題嶋夏草

雲雀

天津空行えやいつこ雲に入かすみに消てあかるひはりは

於松本讃岐守亭二月会探題至当座

故郷萩

真萩咲霧の故郷とはゝやなむかしの秋の色のゆかりに

詠落花随風

さそはても散てふ花のことはりをしらぬはうしや庭の春風

稲荷社法楽月次（四月分）

舟路卯花

暮て行ふなちともなし河岸にうの花咲る色を光に

月次稽古会六月廿日於祓川常陸介（四月分兼題）

郭公

世にはまた聞ぬう月に谷近くすむかひあれや山ほとゝきす

五月まつ花に契りて時鳥世にもらさしとしのひ音や鳴

右二首共宗匠家御点

三月相模守会当之節探題当座

嶋夏草

川嶋やみきは涼しく夏草の中にそめわく露の撫子

三月するつかた藤尾社に参りて藤花咲たるを見て、此地もとより藤尾山といへる古名をおもひ出てよみ侍る哥二首

松高き藤のをやまの花かつら幾千世かけてくり返し見ん

春幾世むかしなからや咲かゝる花の名におふ藤尾の山

いはゆる藤尾山は旧きふみに大和大路の西、稲荷山の桀なるよし。案に当社の今の社地となれり。右哥二首は三首よみて冷泉家へ伺ふ。入道殿御点給也。

稲荷社法楽

樹陰夏風（五月分）

風かよふ森の木陰は夏ころもひもゆふかけて袖そ涼しき

月次稽古会大西下総守亭

水鶴（五月分）

朝またき出て仕へし我門をなにあけよとてたゝく鶏そ

明和八年六月十一日冷泉家之遠祖為秀卿四百回遠忌入道為村卿追慕勧進御出題

夏懐旧

夏ふかき露のくさはもつみそへんふりし跡とふけふの手向に

稲荷社法楽

江上納涼（六月分）

浪風の音もさなから涼しさはあきや入江にまたき立らん

社友稽古月次羽倉摂津守亭

鵜（六月分）

夕月の入かけまちて鵜飼舟さす間もなみの夜半そ更行

人々あさかほの哥よみけれはよみ侍る

咲匂ふ色も涼しく秋を待つゆにひもとく朝かほの花

冷泉前大納言入道澄覚師卿（為村）六十賀当所門人申合詠進哥

六十の賀とりをこなひ給ひけれはいはひの心をよみて寿奉る

従三位秦親盛

年たかく君をそ祈稲荷山幾世もすきのときはかきはに

入道殿より

幾世も杉のと聞えしかは

いなり山いのる言葉もいやとしのたかきためしを杉にならはむ

ちよう覚

稲荷社月次法楽

七月分
草花早

いとはやも秋来にけりとふちはかまほころひ匂ふ野への初風（はつ）

七月分稽古会
鵲

契りけん秋や幾秋かさゝきのはねかはすてふ天の川橋

江亭眺望　探題当座

宿ちかき入江の小舩いつしかにゆくとも見えす浪遠かた

臨時
秋花月

夕露も光をそへて秋の野の月にそ匂ふ花のいろ〳〵

八月分
稲荷社月次法楽

秋苑月

露むすふ草の園生は照月のひかりを花とちらす秋風

八月分稽古会
初鳫

雲霧も嵐にはれて山遠くこゑもさやかにわたる初鳫

八月十五夜詠社頭月

稲荷山秋の最中と照月の光はさしもみつの神かき

九月十六日於松尾安芸亭

社頭祝　探題当座

栄え行御世をそ守る稲荷山しるしの杉の常磐堅磐に

稲荷社月次法楽

九月分
寒庭虫

霜むすふ庭の浅茅によもすからなく虫の音そいとゝ寒けし

稽古会
九月分
鶉

夕間暮哀は尚も深草や秋風さむみうつら鳴声

九月十三夜月

日本の光そこよひあふかはやさらに照そふ長月の影

九月於羽倉石見守亭

寄烟恋　探題当座

あたなりと人は見つゝもゆふ煙おもはぬかたに立なゝひきそ

九月十一日於竈家

寄風恋　探題当座

とはさりし軒端の松に此夕吹はつれなき人の秋風

稲荷社法楽

十月分
杉路霜

稲荷やま行来の袖もさえ〳〵て霜をかさぬる杉の下道

稽古会月次松本信濃守会

十月分
鶴　探題渕亀

神無月尚咲残るしら菊の花になれきてあそふ友鶴

稲荷社月次法楽
十一月分
蘆辺氷

難波かた芦辺よふかく置霜にみきはもけさは氷そめけり

稽古会大西下総守会当座路藤
十二月分
千鳥

いつこにか妻を沖津の小夜千鳥なみの立ゐに鳴(こひ)わたる声

稲荷社法楽
十二月分
連日雪

日をふれはいなりの山のいや高く峯にも尾にもつもるしら雪

稽古会毛利壱岐守会
十二月分
水鳥

住なれし芦辺こほりて朝日さすみきはにうつる池の水鳥

来辰年正月七日
曽祖父古社務親修宿禰尊灵百年灵祭引上十二月七日執行供
進之哥二首

寄庭五葉松詠懐旧意

植残す五葉の松のいつしかにも(も)ゝとせふりてさかえ行かけ(かけそさかゆく)

寄遺書筆跡詠懐旧意

幾めくりたえぬ流のいへのよしむかしをしのふ水くきの跡

明和八年ひさしくやみこもり侍るとしの暮に

身につもる月日もしらてやめる間に七十ちかき年そくれ行

やめる身はいとはや年も暮やと心ほそくそおもひわひぬる

十二月三日羽倉上総介(松本信濃守)会

渕亀　探題当座

住かめの哀そ深き飛鳥川渕も瀬になるをのかおもひに

路藤　探題当座

紫のゆかりたつねてふちのかは花に立よる里の中みち

明和九年辰
歳日

かしこしな恵(くも)みへたてぬ神垣(御点)にまれのよはひの春をむかへぬ

明そむる千世の光をあふかましけふ七十の春をむかへて

明和九年辰

稲荷社月次法楽

冷泉入道殿出題
正月分
春来日暖

稲荷やま日かけ長閑に春くれはたきつなかれも氷とけ行

元日

天の戸の明夜つけて鳴鳥のまつ春しるき声のゝとけさ
いなり山春来にけりと今朝はまつ光をそへてあけの神かき
いなりやま春立けふのしるしとて峯の杉村かすみそめけり
去年より心ちそこなひわつらひ侍りて、正月五日三みねまうてにえまうて侍らさりけれは
老ぬれと引しめ縄の長くあらはふたゝひみつの峯にむかはん
冷泉入道前大納言澄覚殿より正月七日給御詠
寄若菜祝老ことは
つむとしの老は七十なゝくさのわかなに契れ幾千世の春
右答哥　従三位秦親盛上
正月七日耳(に)かたしけなくやつかれか七十を若菜によせて恵み給(ませ)ふ御詠(ゝ)に答へ奉る。
かしこしなけふの若菜のなゝくさに七十いはふ君の言の葉
二月一日
宗匠家和哥御初会
鶯契万春
砌なる松をためしに鶯のはつ音に契る万代の春
正月廿日畑柳安より到来
画一巻王母献寿図二律詩作一章其詩云
城頭春色日相(ニ)催　天外三峯瑞靄開
七袤(シツチウ)偏通鴻寶術　千齢誰識歳星才(ノ)
南山称寿蟠桃熟　東海延僊白鶴来
欲向瑤池問王母　五雲生處是蓬萊
奉賀
荷山三位大西君七十寿算
黄山柳安印
右答哥
畑法眼黄山ぬしの許より、やつかれか七十のよはひふりにしをことふきて王母献寿図匣に唐哥を作り書そへて恵み贈り給はる。その心さしあさからさりしいやをのへんためにやまと哥を読てこれを謝し侍る。
枝かはす桃も柳もいとなかくともに契らん三千年の松
従三位秦親盛
稲荷社法楽月次
水辺柳(二月分)
いなり山このめも春は池水もみとりにすめる青柳の陰
鶯をきゝて

また咲ぬ梅の梢に春しるく花を〻そしときなく鶯

社友稽古始会 兼題二首

二月廿二日於松尾安芸亭

梅盛

木々はみな遅き梢も咲そひてさかりそしるき宿の梅園

路若草

夏はまたにけまよふらし春草のひとつみとりの野辺の通路

稲荷社月次法楽

三月分 杜間花

春幾世八千代をかけて咲匂へ森の木の間の花のしらゆふ

三月十日 社友稽古会於松本讃岐亭月次兼題

花雪

雪とのみ空に散かひくもるまて花の梢を払ふやま風

同並座 閨霰 採題到来

さらてたにねさめかちなる閨の上にあられふる夜をあかしわひぬる

二月廿二日松尾安芸より到来当座 子日

年ことに祝ふ子日の小松原千とせの春を袖にかさねて（む）（さ）

稲荷社法楽

四月分 夕郭公

時鳥世にはもらさぬしのひ音をいなりのやまのゆふかけて鳴

稲荷社法楽

五月分 瀧下蛍

いなり山瀧のしら波よることに玉かと見えて蛍飛かけ

四月廿二日 前妣真渕霊（藤云知命院）依五十回奉追慕供進歌夏十首組題之内詠三首

卯花似月 但此巻頭藤嶋下野守信允（五）勧進〻仍不入

めくりきてその世かはらぬうの花の月にむかしをしのふ面影

卯月郭公

時鳥けふの昔をしのひ音になれもう月の空に鳴らし

杜蟬

露ふかき森の木陰に鳴せみのこゑもしくれて袖そぬれぬる

同通題 寄涙懐旧

五十とせにふり残る身そ跡をとふ哀なみたを袖にかさねて

稽古会 四月廿五日祓川親富会当

四月分 卯花

朝戸出の袖さむきまて雪の色をかきねに見せて咲るうの花

稽古会 五月十三日親臣会当

五月分 田辺蛍

千町田やせき入水に数あまた見ゆるほたるのかけの涼しさ

三月十日松本讃州亭会
閨霰
重複既書之可除
さらてたにねさめかちなる閨の上にあられふる夜をあかしわひぬる

六
四月廿二日取越四月廿二日執行
保田内匠頭忠辰朝臣十三回追慕歌娘みの勧進
早春鶯
鶯の初音に尚そしのはるゝはるや昔の春めくりきて
松本和泉守高任宿祢六十一賀歌公林高教等勧進
四月
子日
於学寂
老をけふいはふ子日の小松原引や手ことに千世を契りて
親臣親業等ことし七十のよはひをふりしをことふきをいひのへんと冷泉家に和哥の題をこひねかひけれは、松為友といふ題を出し給ふよし、うからやからをはしめしたしき人々にもすゝめ、あまた哥をとりかさねて賀し侍りぬけれは右の題の心にまかせて謝侍る哥
老をいはふ松のいつ葉のいつまてもゆくすゑ遠き友となれ見ん
四月廿八日
氏蔵人常芳の本より七十を賀して
源常芳
稲荷山いやとしたかくかさねきてさらにや千世もつかへまつらむ
ことしやつかれか七十を賀し給ひて若竹の蒔絵をかける盃にやまと哥をそへて恵み贈り給ふ。その心さしのねもころなるさま、拙き言の葉にはいひつくしかたく侍れとたゝにもたさんもかへりていやをうしなふことになりにたれは、腰折哥をよみてこれを謝し侍る。
かけしめて長くそくまん笹竹のめくみの露の玉の盃
従三位親盛
五月十三日御殿預荷田信郷之本より
題竹奉寿
従三位秦君七十
脩竹森々繞玉堂　貞姿高節見休祥
更怡枝葉千年緑　偏似主人眉寿長
正五位下荷田信郷拝書
答
やつかれか七十をことふき給ひて呉竹を絵かき唐哥を作り書そへて恵み贈り給はる。そのねもころなる心さしのいやをいひのへまくほりすれと拙き言の葉には中〳〵いひつくしかたく侍れと朽葉をつゝりてその詩の玉韻をけかして謝し侍るのみ。
起ふしの友となれ見は千代もへんはかへぬ竹の契り長くも

従三位親盛

暁恋　探題当座（四月廿五日親富亭会）

逢と見し名残はふかきあかつきにさめてそしたふ夢の面影

篠雪　親臣会探題（五月十三日）

吹さそふ風も霰も音たえて雪にしつけき野辺のさゝ原

稲荷社月次法楽

納涼風（五月分）

稲荷山すきの木の間を吹過て袂すゝしくかよふゆふ風

月次稽古会　信邦会当（六月十日）

隣蚊遣火（六月分）

こなたまて煙へたてすあし垣の間近き宿にかやりをそたく

五月雨　即事

日をふれは千町のさなへ色そひて恵みあまねき五月雨の比

従吉見三河到来詩

倣雪霜号貞節全　留雨露号緑玉連

子猷林中無改色　此君對見萬期堅

右奉賀

大西三品秦公七十初度

喬松菴菅子栗拝稿

答

吉見三河菅原正寛和哥

やつかれか竹林亭に寄題し給ひ詩を賦して七十をことふき給ふ。誠に露浅からぬ心さしのいやをのへんと色なき言の葉なからやまと哥をよみてこれを謝し侍る。

陰ふかき竹のみとりの言の葉の葉かへぬ色そ千世の友なる

従三位親盛

五月廿八日やつかれか七十ふりしを賀して直親宿禰公満宿禰のもとより松の枝に盃をつけて贈り給はりぬ。誠に露あさからぬ心さしのいやをいひのへんために、さかつきといふ詞を句の間によみ入て謝し侍る。

五月雨の空もはる〳〵老のさかつきにこえ行かけの涼しさ

従三位親盛

ちかおんちかなりふりか本より古賀の枝に哥をかき付て贈り侍りけれは心の悦をいひのへんとよみ侍る。

幾千度猶こえゆかん老の坂つくともつきぬ枝の数〳〵

やつかれか七十の賀し侍りけれは冷泉入道殿よりことふきの詞を唐哥に作書けるうるはしき盃をいはひて恵み給はる。その包かみに。

老松の木かけ賑はひ打むれてこゝろたのしくいはふことふき
といふ御詠を書そへて贈り給はりければ
親盛
浅茅生の宿のふる木も梢までもれぬ恵みのかけそ賑はふ
従橘尭常（橋本越後）賀七十
此宿のさかへもしるし神もさそまもりますらむ千世のよはひは
やつかれか七十を賀し給ひていみしき末広にやまと哥をそへて恵み贈り給る。誠にいんさきみやつかへし侍る時よりはらからのさまにむつましかりしか今に猶むかしかはらすねもころなりし心さしをいやいひのへんこと拙言の葉にはいひ尽しかたけれは只ことふきて給ふ哥の答をのみよみて謝し侍る。
いや高きかけをあふきていなり山此神かきに千世もつかへん
従三位親盛
稲荷社月次法楽
（七月分）初秋萩
稲荷山立秋しるく咲萩のけさは花をもみつの神垣
（七月廿二日）稽古会月次於目代家会兼題
草花露
野を広み花のさま〳〵色わけて露さへにほふ秋のもゝ草
（同探題）神楽
そのかみの岩戸もかくそ明るよの空もほの〳〵庭火たくかけ
六月十日於竈家会探題
契恋
等閑におもひなすきそ色かへぬまつをためしに契る言の葉
稲荷社月次法楽
（八月分）初鳥来
稲荷やま木々の梢も色つけはふもとの小田にかりの来にけり
稽古会於高教亭被催八月十日兼題
（八月分）水辺月
浪風の音もさやけし大井川つきのかつらの秋の光に
（同日）駒迎（探題当座）
千々の秋くもらぬ御世に相坂の関路こえくる望月の駒
稲荷社月次法楽
（九月分）擣寒衣
いなり山聞も霜夜に音さへてころも打なり深草の里
月次稽古会兼題於公林亭被催九月四日
（九月分）朝霧

明わたるふもともそこと見えぬまて朝きりふかき四方の山のは
同日探題
早蕨
折はやす心も野辺の長閑さははるの光にもゆるさわらひ
九月十三夜に人々月の哥よみ侍りてよめといひ入けれは
御点
秋つすの秋のこよひと雲霧もはれて名におふ長月の影
めてあかぬ後のこよひの秋ふかく尚も照そふ長月のかけ
稲荷社月次法楽
十月分
山初雪
いなり山ふもとの杉もしろたへのゆふかけそふる今朝の初雪
稽古会月次於親業亭十月十一日被催兼題
十月分
夕木枯
秋の色をさそふのみかは夕間暮吹そ寒けし山の木からし
月次会十月十一日親業亭より到来探題
山家
山ふかく哀すむてふかひもなくうき世にすれぬ人の心よ
稲荷社法楽
十一月分
池水鳥
ことかとや先こほるらしいなり山池のみきはにわくるをしかも
十一月廿八日稽古会於親冨亭兼題
閨上霰
さらてたにねさめかちなる閨の内に霰ふる夜は夢も見はてす
明和九年辰十一月廿六日
家祖父親親光宿禰百回追遠供進
冬懐旧
点
霜雪とふりし袂にいそとせを重てけふのあとを社とへ
霜月のかけをかさねて百めくりその世をしのふ有明の空
来巳年正月廿四日
家祖親清宿祢五百回追遠供進
春懐旧
点
あふけ尚遠き昔のたまさかにあくれるけふの春の光を
世々遠く霞へたてゝ久かたの空にそしのふ五百年の春
梨木家
下鴨社禰宜正三位鴨祐之卿来巳年正月廿九日五十回其孫祐
為宿祢勧進祐為冷泉家之門人云梨木上総介
春述懐
点
幾めくりかすめる空になきかけをいまはたしのふ五十年の春
□る文に残る名しるくめくりきて世にもしのはん五十年の春
（以下貼紙）
明和九年十月十三日菅原永叙後妻房男子誕生、七夜にその

子を松によせて千世松と名つけて祝の心をよみはへる哥
二葉より松のときはにみとり子のおひさきいはふ千世の行すゑ
明和九年十月廿二日前妻美与三十三年にめくりける日読て
手向侍る
老ぬれは尚そしほるゝ神無月なきかけしたふ袖はしくれて
（以上貼紙）
安永元年辰十二月
稲荷社月次法楽
歳暮梅（十二月分）
稲荷山また暮はてぬ年の内にまつ咲梅をみつの神垣
社友稽古会月次十二月分十二月十一日於為廉亭満会
網代寒
あしろもる身や寒からん衣手の田上の川に霜をかさねて
十一月廿八日於親富亭会探題
初冬
冬くれは時雨をさそふ山かせも今朝吹かふる音のはけしさ
十二月十一日於為廉亭満会探題
山
老ぬれはなれし身たにも聞わひぬ軒端はけしき山かせのこゑ

或人和哥の書二巻たつさへきたりて、見れは宗匠家の著述の書と見侍りけれは、その出る所しか〳〵尋けれとさたかならてあやしとおもふ心をよみてやかて宗匠家へさし出し侍る二首
若の浦になみ〳〵ならぬもしほ草あやしやこゝに風さそひこしくり返し見つゝそおもふもしほ草もししら浪のさそふわさかと
其後右件乃書籍熟覧畢入道殿（五）読てさし出す哥（并）御答の御詠
明月の門に入ひと〳〵この道に入まよふをあはれとおほしめして御教誡の文二まきしるさせ給ふを、くり返し巻返して置ところをしらす拝し見かしこみて
分まよふ人はあらしなあきらけき月に小倉の道しるへせは
入道殿御答御詠
あきらけき月をしるへの道しるへともにまよはぬ跡もかしこし
澄覚
安永元年辰十一月
歳暮
なへて世に暮行けふの年月をわか身にのみと惜むをろかさ
安永二年癸巳年

年始にいはふ口号

安(ヤス)らけく永そいはふあらたまの年の名しるき千世の初春

春立ける日読侍る

稲荷やま春来にけりとこの朝けかすみてみつの峯の長閑さ

春のはしめ雨そほふりて鶯の鳴けるを聞て

ふりそめて草も木のめも春雨にうくひすとなく声の長閑さ

稲荷社月次法楽

正月

神垣に仕へてかさす梅の花やちよをかけて匂ふ春風

藤原助具去冬新蔵人に被補今春悦を申遣哥

院蔵人より　内蔵人にうつり昇進し給ふ悦をいひのへんと

祝の心をよみて送り侍る。

春幾世尚色そへてさかゆかん大内やまの春をためしに

藤原宗韶の先祖宮つかへし侍る始をたつぬれは当家よりわ

かれてこのたひ院の蔵人に補られけれは、外ならすかたし

けなくわきて悦ひを申つかはすとて

かしこしなはとやの山の春幾世みとりをそへて尚もさかゆけ

答　　藤原宗韶

あふくそよめくみかしこき洞中に春のみとりの色そゝひぬる

二月

下鴨梨木上総介祐為之母儀六十賀勧進

寄松祝

いく老のよはひは松をためしとて宿に色そふ万代の春

二月一日宗匠家御初会

寄竹祝

吹も異に長閑かりけり此宿にはかへぬ竹の千世の春風

稲荷社法楽

二月分

若草

野をひろみ竹の葉山も色そへてみとりにつゝく春の若草

社友稽古会於権目代上総介亭

二月分

江上霞　二首之内

住吉や松のみとりも色そへて長閑にかすむ春の海原

右同断

社頭松

神垣に春幾めくりいろそへてかけいや高き森の松かえ

稲荷社法楽

三月分

苗代

引しめにさかひもみえてわせおくて種まきわくや小田の苗代

稽古会於竈家四月十日会

三月分

野亭菫

春の野は草の庵の軒端まてすみれつみこし人そ賑はふ
二月分
権目代家会探題
橋
山桜峯の嵐のさそひきて花咲わたす谷のかけ橋
春雨に 即時
野も山もわかす緑の色そへてめくみあまねき春雨の空
伏見の里にて春雨に梅花のしほれうつろひなとしけるを見て山の花をおもひやりたる心を
梅渓の花はいかにやなりぬらんさとの梢も雨にうつろふ
二月五日菅原正寛母の九十の賀し侍る祝のもちひに母のみつから筆をそめて寿字をかけるをそへて祝おくりけるに謝して読てつかはし侍る哥
神籬に老のよはひをためしにていのち長くそ猶もつかへん
為廉許より千載の桜の花を折て送り給はる返事に
手折こす人のめくみの色香をも露浅からす花に社見れ
梅の花さかりに
匂はすは雪と見るまて咲埋梅のさかりの花の春風
三月十七日
稲荷社神幸
稲荷やまもとの御幸の跡とめて尚もさか行神のまに〳〵
同綸旨
神まつるみことかしこみいなり山栄る御世を尚も祈らむ
同奉幣
万代とけふのみいてのいやしろにいはひさゝくるうつのみてくら
（以下貼紙）
三月廿八日の夜の夢に家父古三位殿より給はる哥
いとかろく疱瘡の神や守るらんみきをそなへて汝祭らめ
その夜夢さめて答まつる心を書付る哥
かしこしなみなやみかろくまもるてふ神にみきすゑいはひまつらん
（以上貼紙）
稲荷社月次法楽
閏二月分
款冬
いはてしも春とはしれる色見えて盛久しきやまふきの花
社友稽古会於大西下総守亭
閏三月分
閏月花
遅桜くはゝる春の色香とて尚めつらしく誰もめつらん
椿の花を見て
朝なゆふなつら〳〵椿つら〳〵と見つゝ巨勢野を花にしそ思ふ
閑居の花の心を

春なから人しもとはぬ山里はたゝ花をのみ友とくらしつ

春雨のふりける日

きのふまてめてこし花もふりそひていとゝさひしきけふの春雨

やよひのうるふ月のすゑつかたにしきりに鶯の鳴を聞て

くはゝりし春はいくかもあらしとやたえすなくなる鶯の声

直親宿祢杜若花を持来り恵み給はりけれは

色に香にしるくそ見つるかきつはたむらさきふかき人のめくみを

杜若をこと所にうつし植けれはあやめの花のことくさき侍

ると人のいひけれは

移し植し汀をうしと杜若あやめもわかす花や咲けん

稲荷社還幸御祭の日（四月三日卯）

稲荷やまあふひのかつら御世長くかけてそまつるみつの神垣

稽古会月次兼題五月廿二日於高教亭被催

新樹露（四月分）

朝なゆふな露も涼しき玉かしは山は葉ひろに若枝さかえて

稲荷社月次法楽

更衣（四月分）

いつしかとうつりきにけり夏衣いとひし風も袖にまたれて

野　三月分会竈家探題

見し春の色香のゝちは都人嵯峨野の秋の花を社まて

稲荷社法楽

郭公帰山（五月分）

ふる巣にや今かへるらん時鳥いなりの山のすき間行こゑ

社友月次稽古信邦六月廿二日被催五月分竈家より探題河水

到来

夏暁月

夏なから秋も覚ゆる涼しさはあかつき露にやとる月影

閏三月廿三日於東家稽古会探題二首之内

折款冬

けふもあれとあすこん人にみせはやとかつ折残す山吹のはな

瞿麦花を見て

朝な夕な見るたひことに色わきて尚めつらしく咲る撫子

閏三月廿三日於東家会探題二首之内

外山鹿

哀さは正木のかつらくるゝよりあくるとやまに鳴鹿の声

孫親実（四月十九日）いむさき非蔵人の見習に侍りけるを此度別（コト）につとむ

へきよしめしくはへさせ給ふかたしけなさをかしこけれと

我後の世まてしらしめんと

何にかもつゝみて置んかしこさは子らか袖までもれぬ恵みを
五月朔
妻か老母奈良よりまかり来てけふなんかへると聞えければは
撫子によせて
花もけさ哀にかれの色見えてしほれにけりな露の撫子
五月五日
藤森社神祭
年ことにたえぬ祭の神のこまさつきのけふのゆふかけて引
同走馬を
深草やけふの祭りの里の馬あやめのかつらかくるをそ見る
来午年五月一日中院為家卿五百回忌冷泉家御追遠
夏懐旧
五月やみけふの昔をしのひ音になくや小倉の山ほとゝきす
今年八月廿九日平等院殿為久卿三十三回冷泉家御追慕
秋懐旧
幾めくり秋をかさねてふりし世をしのふ袂は露そ置そふ
あひしれる人の身まかりにけるよし告こしたるをきゝて
たれも行道とはいへとはかなくもさきたつ人そ悲しかりける
稲荷社月次法楽
六月分
杜夏草
陰ふかく森の梢も一つ色にみとり涼しき露の夏草
稽古会兼題
六月分
河夕立
水上やふると見しまにはや瀬川風きをひきて過る夕立
五月廿二日於高教亭会探題
四月分
旅夕立
此里にやとりとらなん雲とちてゆくゑも見えぬ夕立の空
時鳥の初音を聞て
山ちかく住は社聞時鳥世に待あへぬまたき初音を
には待えぬ
稲荷社月次法楽
七月分
庭萩
庭もせの月に夏まつゆふくれはそれかとまかふ萩の立風
月次稽古会
七月分
萩映水
川岸に陰をうつして咲萩はなみのあや織錦とや見む
稲荷社三神主等より七月六日にとし〳〵草花七種を伝奏家
に附てさし上献れり。ことしもかはらすさし遣献る祝の心
をよみ侍る哥
御点
御世なかく猶幾千世もつみそへてさゝけまつらん秋の初花
星合の契りをためし千五百秋たえすさゝけん七種の花

門柳　祇川家会 探題

なひかすは出入人も等閑に見てや過なん門の青柳

河氷　竜信邦会 探題

山河のたえぬなかれも小夜ふかくこほるやけさは音のしつけさ

乞巧奠　探題応求

あひにあひてけふ九重に匂ふらんほしの手向の花の七種

稲荷社月次法楽　八月分

野鹿

草ふかく妻やこもると男鹿なくこゑ吹おくる野辺の秋風

稽古会兼題月次　八月分

竹間月

深草や竹の葉山の月の夜は小枝もりくる影を社まて

壱岐国壱岐郡函崎宮大宮司吉野常陸介壱岐ノ公光年来毎々懇望之処今度頻依乞不得止事猥詠俗題尤伺入道殿一覧之上応求如左

壱岐国筥崎宮

十二景

廟前ノ桜花

神籬の光をそへてさくら花いろ香にあくる筥前の春

殿ノ東紅葉

露しくれ秋の手向と幾千入とのゝみきりにそめしもみちは

七ナヽ枝馬エノハ石セキ

昔たれ七枝のまつを岩か根にこま引植し跡にや有けん

釘クキノヨノ卯夜ノ雨

小夜ふかく雨のふりきて音たかく窓打すさむ釘の尾の里

馳バヽノ馬釘ヽ石

いつの世に神のみやつこ打みつてゝ名付そめけんはゝの釘石

天ヽ山ノ晴嵐

雲はみな松のあらしに吹はれていやかけ高き天津山の端

平江ヒラエノ落鳫

幾つらそ浪路はる〳〵渡りきて平江の小田にあさるかりかね

中ノ山ノ穐月

いつはあれと猶此ころは照そふる月の名高き秋の中山

大窪オホクボノ積雪

幾日かすふりそふまゝにおほくほの野辺さへ高くつもるしら雪

瀬戸ノ帰帆

瀬戸の海漕行おきやなみあらくおもふかたほにかへるうら舩

清浜キヨハマノ潮ウシホノ声コエ

清浜や浦風遠くさそひきてさし引塩の音そ聞ゆる

東ノ海ノ漁火

あま人はいとまもなみのよるも尚ひかしの海にうかふいさり火

安永二年七月

御灵祭りによみてそなへまつる哥

そのかみの世々のみたまに玉串をさゝけ手向ていはふ初秋

此ゆふへ御霊の祭のいやしろにそなへ手向る秋のくた物

稲荷社月次法楽

水辺菊（九月分）

咲匂ふ此山水の底きよくちとせのかけをうつすしら菊

稽古会月次於松尾安芸亭□□十一月廿

庭紅葉（九月分）

夕附日猶一入の色そゝふしくれし庭の露のもみちは

稽古会大西家（七月分）

海郭公（探題）

さたかにも此ゆふなきに聞はやな浪にまきれす鳴ほとゝきす

八月十五夜月

十夜あまりいつよりもけに空はれて名高き月の影そ照そふ

八月十五夜於松本家会探題到来応求

月多秋友

此宿に猶も契らん秋ことにともなふ月の万代のかけ

於毛利家会探題到来（八月分）

寄水雑

幾世ゝかつかへてすめるいなり山たえぬなかれの端の神かき

稲荷社月次法楽

寒草（十月分）

玉にぬく露の尾花もいつしかにむすひかへたる霜の寒けさ

稽古会月次

落葉深（十月分）

吹さそふ庭のあらしも色見えて落葉の上につもるもみちは

重陽

幾千たひ尚も汲はや長月のけふ咲匂ふ菊の盃

九月寿良七十賀　修応勧進（宗匠家出題）

寄鶴祝

契れ猶宿になれきて末遠く千世を重ねん鶴の毛衣

三輪家よりむこかね則黨身まかりし由告来を聞て

浅からす結ひ置しか露の身のはかなくきえし人そかなしき

襖のやれたるをかくさんためいろなき言の葉の短尺押けれ

はわかの浦なりと人のいひけれは
はつかしなかきあつめけるもくす草わかのうらとや人の見るめは

石峯寺時学和尚の本へ菊花を贈り遣す文の奥に書付侍る哥
見せはやと待過す間に色もかもうつろひぬれは手折しらさく

稲荷社法楽
十二月分
雪中鳥
秋霧の空にをつれていま来鳴ゆきの夜寒き衣かりかね

稽古会月次
十一月分
石間氷
よもすから河かせさえて行水のよとむ石間やけさこほるらん

於松本讃岐守亭十月分
稽古会探題
春月
咲梅の色香もともに立こめてかすみに匂ふ春夜の月

稲荷社月次法楽
十二月分
夜神楽
神垣や引しめなはの長夜にふきもたゆまぬ糸竹の声

稽古会兼題
十二月分
春漸近
暮て行としのこなたにいとはやもはるまつ梅や咲匂ふらん

十二月廿五日
年内立春
神垣はまたふるとしのみしめなは冬かけてけふ春やこゆらん

（以下、続稿）

注

(1) 「そふ」の左傍に抹消符を付した上でその抹消符を更に墨で抹消、右傍に判読不能な文字を書きそれを墨で抹消。

(2) 「や」の左傍に抹消符を付した上でその抹消符を更に墨で抹消、右傍に「の」とあり抹消それを墨で抹消。

(3) 「松本駿河守」を墨抹消し、左傍に判読不能の数文字あり、それを墨抹消。

【附記】本研究はJSPS科研費19K00351の助成を受けたものである。